

西インド：女神の聖地を訪ねて

松枝 到 所員・表現学部教授・東 聖子 和光大学修士課程

2003年度東西交渉史研究会によるインド調査の後半部は、インド西部グジャラート州を中心におこなわれた。その主な目的は、象徴図像研究会や東西交渉史研究会の前身でもある南西アジア研究会など和光大学の研究グループがおこなってきた、ヒングラーズ女神信仰の継続調査と、スィッディー（*Siddi*）と呼ばれるインド亜大陸に住むアフリカ系の人々についての調査である。本節では後半の調査概要と、そのなかでも特にヒングラーズ調査について報告することにする。またスィッディーに関する報告は村山報告を参照されたい。

ヒングラーズ女神調査の蓄積と調査目的今回のヒングラーズ調査が、先行の調査報告とどのようにつながっているのか説明するため、まずここで、過去のヒングラーズ女神に関する調査について簡単に紹介する。ヒングラーズ研究を行う立命館大学の中村忠男氏と、今回の調査メンバーである村山和之氏を含むパロースターン学術調査隊（代表・前田耕作）が、1996年パキスタンにあるヒングラーズ女神の聖地ヒングラーズの調査をしている。それをもとに中村氏は、現在のヒングラーズ信仰と巡礼に関する報告を行っている〔中村 1997, 1999〕そのなかで、今日のヒングラーズ巡礼が印パ分離独立以前に報告されているものとは大きく異なるということ、その新しい巡礼が定着するにあたって国際的なヒンドゥー教徒の移動が関与していること、さらにパキスタンのパロースターン南部では80年代末から、ヒングラーズ巡礼を通じて独自の伝承が築かれつつあるが、その伝承がスィンド、グジャラート地方の地方的な信仰に基づいていることなどが明らかにされている。また1998年に中村、村山両氏はヒングラーズ聖地の西に位置するマクラーン地方、アラビア海上の島ハフトラルの調査で、ヒングラーズ女神の神殿を訪れている〔村山 1998〕1999年には和光大学南西アジア研究会がインド・グジャラート調査を行い、印パ分離独立以前にヒングラーズ巡礼と密接な関係にあったというゴラクナート派の僧院を訪れ、そこにはパキスタンの聖地巡礼ができない地元の信者のために二つのヒングラーズ寺院が建立されているということがわかっている〔前田 2000〕そしてグジャラート州カティアワー



ル半島の沿岸部を中心に、ヒングラージ女神信仰の広がり、およびパキスタンとの結びつきに関する調査を行ってきた。南東沿岸のかつてアフリカやペルシア湾岸との貿易で栄えたポールバンドル、巡礼地として多くの人を集める海辺の聖地ソームナートとそこへ向かう人たちの集まるヴェラーヴァル、分離独立後もポルトガル支配が続いたディーウである。アラブ首長国連邦のドバイにあるインド人宝石商の集まる地区や、イギリスのロンドンにあるヒンドゥー寺院でも調査を行った。ロンドンで、「グジャラート州にあるカンカイ寺院がヒングラージと関係がある」という情報を得、それを確認するために2003年の8月に両氏はカンカイ寺院へ向かった。しかし、ちょうど雨季であったため、カンカイ寺院やその周辺に近づくことができなかった。乾季にあたる今回の調査は、このカンカイ寺院を訪れ、ヒングラージ女神との関連について調べるのが目的である。

調査概要

ヴァドダラー（バローダ） Vadodara (Varoda)

グジャラート州最大の都市アフマダーバードから南東約100km に位置し、旧バローダ藩王国の首都として発展したバローダは、ベンガル菩提樹の街として知られている。インド国内だけではなく海外からも学生も多い Fine Art College や博物館やギャラリーなどが集まるバローダは、グジャラートの文化的中心地ともいわれる。ここは今回のスィッディー調査の拠点とした

ラージピープラーに向かうための経由地となる。

3月4日、デリーからバローダへの夜行列車に乗る。車内は3月7日のホーリー祭を聖者バーブー・アーシャーラーム Babu Asharam とともに祝うため聖地スーラトへ向かう巡礼者であふれ、バジャン（神への賛歌）が響き渡っている。聖者バーブー・アーシャーラーム信仰は15年程前から広まり、ホーリー祭には50万人近くが集まるという。3月5日、バローダに到着。ラージピープラー行きのバスの時刻と所要時間を調べる。我々にとってグジャラート州最初の街であるバローダでは、店先で商売をする女性の姿を多く目にした。調査前半に訪れたビハール州では、街で見かける女性の数すら多くなかったので、その光景はとても新鮮に見えた。

ラージピープラー Rajpipla

1897年、イギリス植民地政府の過度の関与を断ち切った藩王チャトラISINGジー Chatra Singhji と、交通網の発展や近代的な病院・絵水設備・発電施設の建設など、街の改革に成功したヴィジャISINGジー Vijay Singhji の功績により、模範的な王国として栄えたのがラージピープラーである。1947年に独立インドの統治下に入り、翌1948年にはボンベイ州（現ムンバイ）に合併した。現在のようにグジャラート州に属したのは1960年のことである。

3月6日、バローダからバスに乗り、ナルマダー河を越えラージピープラーへ。ラージピープラーでは、マハーラージャの所有するラージワント・パレスホテルに滞在する。このホテルは現王ラグビールISINGジー Raghbir Singhji と王妃ルクマニーデーヴィー Rukmani Devi が、ヴィジャISINGジー統治時代の中心であった建物を観光施設やホテルにしたもので、彼らの住居にもなっている。彼らの好意によりホーリーの前夜祭やホーリー祭に参加出来たばかりでなく、スィッディー調査に必要な情報を提供してもらった。また、彼らのもとで働くホテルスタッフからも、調査日程等に関するアドバイスをいただく。

過去に何度かスィッディーの住むラタンブル村 Ratanpur へ行ったことがあるというドライバーを紹介してもらい、車でラタンブルへ向かった。詳細は村山報告を。日没後、満月の下で、敷地内にドンド焼きのように積み上げた薪に、バラモンの祈りと共に火が放たれ、ホーリーが始まった。明日は、色とりどりの粉や水をかけあって楽しむ日である。

3月7日、ホーリー祭のため調査は不可と判断する。ホテルの庭やプールでは、宿泊客や敷地内に住む人々が色水をかけあって、ホーリー祭を祝って

いる。

3月8日、スィッディーのパフォーマンスを記録するため、再びラタンブルへ。彼らの守護聖者パーワー・ゴール廟境内での収録後、パフォーマンス・グループのリーダーであるサッピール氏から昼食に招かれる。私たちと同行していたドライバーも含めて、昼食をご馳走になる。ラージピープラーへの帰路、道沿いにあるヒンドゥー寺院についてドライバーに尋ねると、どの神もしくは女神の寺であるのかすべて答えてくれた。

そのなかで、私たちは2つの寺院に立ち寄った。1つはパーティージー・マハーラージ Bhatiji Maharaj の寺院である。我々はこの神の名前を聞いたことがなく、いったいどんな神なのか見てみたかったのである。この地方の神なのかと尋ねると、昔このあたりで活躍したマハーラージが神になったとのことである。そしてその子孫が今も健在だという。バザールプリントにはグジャラーティー文字でその名が書かれていて、白いターバンを巻き髭を生やしたマハーラージが、白馬に乗り剣を振りかざしている。

また、その隣には女神のバザールプリントが掲げられていた。コーリヤル女神 Khodiyar Mata といってグジャラート州カティヤワール半島東部の都市バウナガル Bhavnagar にこの女神の聖地があるという。バザールプリントには紺色のヴェールのようなものを身にまとい中心に大きく描かれた女性（女神）、その背後には一匹のワニを挟んで、同じヴェールの女性（女神）6人が小さめに描かれている。さらに後ろにはこの女神のいる寺院が描かれ、その方向に向かって手を合わせるマハーラージとおぼしき男と白馬が描かれている。

もう1つはスィコータル女神 Sikotar Mata の寺院である。アラビア海交易を行う商人が、安全を祈願してアラビア海に浮かぶソコトラ島を神格化したという。その女神がスィコータル女神である。アラビア海沿岸地域での信仰を想定していたが、内陸にあるラージピープラーでもスィコータル女神信仰がみられるようだ。

3月9日、次の目的地であるアフマダーバード行きのバス時刻と所要時間を調べ、市街にあるクリシュナ寺院 Gita Mandir を訪れる。街の幹線道路沿いのバザールで、グジャラートおよび西インド地方の神が描かれた大衆宗教画（バザールプリント）を購入。遠方からの客人として歓迎された私たちは、店先でチャイをご馳走になる。なお、この店の主人はムスリムであり、私たちを囲んだ人々は、ラージピープラーは、マハーラージャのもとでムスリムとヒンドゥーが仲良く暮らしてきた地であると語った。「ハインス・システ

ムはよかった Highness system accha tha」という彼らの話から、この地のマハーラージャが今でも信頼を得ている様子が伺えた。

アフマダーバード Ahmadabad (Amdabad)

グジャラートのスルタン、アハマド・シャーによって自身(アフマド)の土地(アーバード)として15世紀半ばにつくられたイスラーム色の濃いアフマダーバードは、現在グジャラート州最大の都市である。質の高い綿や絹、錦糸の産地として中世の重要な貿易中心地となり、17世紀の初めには、西インドの最も栄えた都市のひとつとなり、「ロンドンと並ぶ豊かな街」と称されるほどであったという。この大都市はヒングラーヂ女神調査の中心地となるササーン・ギールへ行くための起点となる。

3月10日、ラージピープラーから州営バスでアフマダーバードへ。アフマダーバードからジュナーガルを經由してササーン・ギールへ入ることとなる。ジュナーガル Junagadh まで323kmの道のりをバスで行くことにする。それまでのバスとは異なり長距離バスなので、チケットを事前に購入しなければならない。パールディー・チョーク Paldi Chowk バス発着場の側にはバス会社がしのぎを削っており、そのなかからジュナーガル行きのバスを運行している会社を探し、翌日の寝台バスチケットを購入する。

3月11日、バスが出発するのは夜なので、それまで情報収集に努めることにする。ホテル付近を散策していると、海に浮かぶ船に乗ったスィコータル女神の布絵を売る初老の男性に会う。彼は型押しと手描きで、染色した布に絵を描く職人であった。彼の家を訪れ、仕事場を見せてもらうことになった(写真1)。家には、スィコータル女神のバザールプリントが飾られている。家のすぐ前に日差しや雨がやっと避けられるようなテントがあり、そこを仕



写真1 型押しを用いて作業をしている職人

仕事場としているという。彼からスィコータル女神の布絵を購入する。おもにアラビア海を渡る商人に信仰されてきたというスィコータル女神の信仰が、ラージピープラー同様内陸にあるアフマダーバードでも確認された。

グジャラート大学 Gujarat Vidyapith に赴き、大学付属の先住部族研究所 Tribal Research & Training Institute で学芸員アルヴィンド・ゴースールカル氏 Arvindh Ghosalkar に会い、スィッディーについての新たな情報を得ることが出来た。ササーン・ギール付近にもスィッディーの村があるとの情報を得てはいたが、その村の名前は明らかではなかった。その村はジャムブル Jambur という名であることと、大まかな位置関係を教えてもらった。

また、庭園と屋敷全体が博物館になっている、入場無料のキャリコ博物館に行き、膨大なコレクションの一部を見て回った。クリシュナをテーマとした更紗に見られるシンボリズムについて、ガイドの女性が詳しく教えてくれた。

アフマダーバードから夜行寝台バスに乗りジュナーガルに向かう。バス発着場には数分おきにバスが到着し、客を乗せるとすぐに出発する。発着場といっても行き先を示す看板などは一切ない。バス会社の前に自社が運行するバスが停まるようになっているため、バス会社が密集する大きな幹線道路を挟んだ一帯が、すべてバス発着場になっているのである。バスの行き先を叫ぶ乗務員の声を頼りに、乗客はバスを見分け、あわただしくバスに乗り込む。ピーナッツなどを炒って売る屋台や子供向けにおもちゃなどを売りにくる人が、バスを待つ乗客に混じっている。ジュナーガルに着くまでに休憩のため2度ほど停車した。

ジュナーガル Junagadh

アフマダーバードの南西約250km。宮殿やミナレット、植民地時代の建築が多くみられるジュナーガルは各時代の首都として栄えた街である。5世紀まではマウリヤ朝とグプタ朝、9世紀から15世紀にはラージプート、17世紀にはムガル帝国から任命された統治者、そして1947年まではバービー藩王国の首都であった。住民の多くがヒンドゥーでありながらも藩王がムスリムであったため、印パ分離独立時にはこの地の帰属が問題となった。ジュナーガルはササーン・ギールに行くための経路地となる。

3月12日、早朝ジュナーガルに到着。調査プログラムを組むために、ササーン・ギールでの情報収集と調査の拠点となる宿探しを急ぐ必要があるため、出来るだけ早くササーン・ギールに入りたい。昼のバスに乗り、日没前のササーン・ギール村到着をめざす。12時過ぎのバスに乗るつもりであったが、バス乗り場にバスが来ると一気に人が乗り込み車内はすぐに人であふれた。大きな荷物をいくつも抱える私たちは、このバスに乗るのをあきらめざるを

えなくなる。旅行会社が運行するプライベートバスを利用することにした。プライベートバスは12時50分に出発し、途中何度も人を乗り降りさせながらササーン・ギールへ向かう。

ササーン・ギール国立公園・野生動物保護区 Sasan Gir

ジュナーガルから南へ約60km ササーン・ギールという小さな村は、ギール国立公園のすぐ側に位置し、国立公園への入り口となっている。ヒングラージ調査の目的はギール国立公園内にあるカンカイ寺院とヒングラージ女神との関連を調べることである。(詳細については後述)。ササーン・ギール村に宿を取り、そこから車を手配しカンカイ寺院とジャームブルへ向かう。ギール国立公園内には野生動物保護区が存在し、この保護区内に生息するアジア種のライオンが観光の目玉となっている。しかし1972年に始まった保護区計画は、さまざまな問題を孕んでいた。かつて豊かな水と牧草に恵まれたこの地域では、アジア種のライオンと土地の部族であるマールダリー族 Ma1dharis がほとんど衝突することもなく共存していた。ライオンは彼らの家畜を襲ったりすることはなく、彼らは家畜を守るために特別なことをする必要がなかった。

しかし、水力発電計画に伴う森の開墾と行政の管理によって、両者の関係は一気に悪化したのである。森林の伐採でライオンの食性が完全に変化しマールダリー族の家畜を獲物とするようになったのだ。そしてそのようなライオンは森林警備員によって殺されていった。このようにして20頭近くに減ったライオンを保護するために、マールダリー族の国立公園外への移住政策とともに保護区計画が始まったのである。マールダリー族の人々は遊牧を生業とし、厳格な菜食主義である。近くの町で家畜の堆肥やギーを売り生活の糧にしている。今でもマールダリー族の一部の人々は公園内で暮らしており、彼らは夜になると家畜を柵で囲って守るのだが、昼間には牧草を求めて移動するので、その際にライオンの餌食となることがある。当初20頭余りだったライオンも、現在ではおよそ300頭が公園内に生息している。しかし現在の頭数を維持するのに十分な面積が公園にはなく、問題となっている。国立公園内では豹や狼、ハイエナ、ジャッカルの、ヤマネコ、4つ角のカモシカ、ヌマワニ、さまざまな種類の鳥類などが見られるようだ。ライオンをはじめ、これらの野生動物を目当てに観光客がササーン・ギールへ集まる。

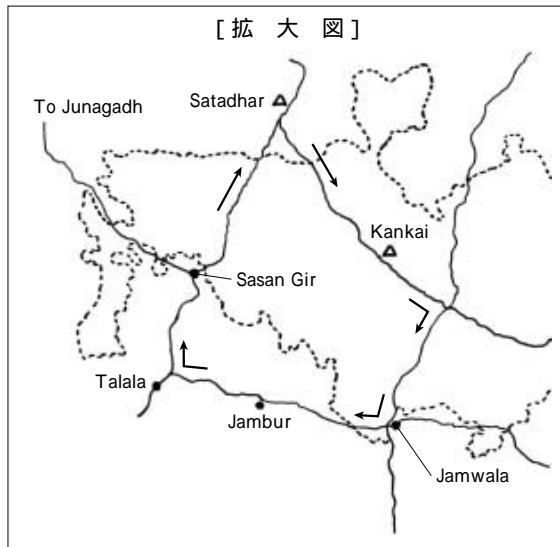
また、私たちのめざすカンカイ寺院は、トゥルスイーシャーム Tu1sishyam 寺院同様、公園内の観光名所となっている。巡礼だけではなく、

両寺院から湧き出る温泉を目当てに来る人も多いようだ。

ジュナーガルから約1時間半かけてササーン・ギールに到着。バス通りを挟んで両側にいくつかの商店・食堂があるが、客の姿はほとんどなく店の店主とおぼしき人しか見当たらない。側にある食堂に入りガイドブックを広げ、宿を見に行こうとしていた私たちに、観光客だと察知した少年2人が寄ってくる。どこのホテルを探しているのかと英語で問いかけてきた。ホテルの名前を言うとすぐそこだから連れて行ってあげるといふ。彼らにつれられ5分も歩かず宿に着く。部屋を見せてもらい値段交渉をして、この宿に泊まることにする。各自部屋に荷物を置き、早速、宿の主人に我々の目的を伝え、カンカイ寺院とジャームブルについて尋ねる。主人は現在地、カンカイ寺院、ジャームブルの位置関係を私たちに説明し、それらを訪れるためのプランを提案した。しかしそのプランにはライオンの多く生息する野生動物保護区と大きな滝、そしてサターダールという聖地を見に行くというのも含まれている。目的を伝えたにもかかわらず、私たちが観光客とみなされたようだ。というのも私たちがここで必ず訪れなければならないカンカイ寺院も、野生動物保護区同様、ギール国立公園内の観光名所となっているからだろう。是非ライオンを見に行ったほうがいいという主人の強い勧めは断ったが、聖地サターダールへは行ってみることにする。

ササーン・ギール村にも寺院がある。石造りになっていて、シヴァ神が祀られている。寺院のすぐ隣の家では、水牛のミルクを攪拌してバターを作っている。

3月13日、早朝に宿を出発。まずはササーン・ギールの北東に位置するサターダールへ向かう。国立公園内に入るにはゲートを通らなければならない。ゲート脇には事務所のような小さな建物があり、係員が常駐している。ゲートを通る際にはここで許可証をもらう。また、カメラやビデオなどで撮影をする場合には、ここで撮影料を払うことになっている。公園内の道を乗客と彼らの荷物で一杯になっているバスや、荷を積んだ大型トラックや馬車も通る。国立公園内には、生活に不可欠な道が通っていることがわかる。線路も通っており、私たちの車はサターダールに着くまで何度か線路を越えた。鉄橋を横目にしたこともあった。日の出の時刻を迎え、山際が濃いオレンジ色になり、青黒かった空が白っぽくなっていった。明るくなると周りの様子がよく見えるようになり、まさにジャングルの中を走っていることに気づく。乾季であるため木々に緑の葉はついていない。また野生の孔雀や鹿を頻りに目にした。道を横切る孔雀のために車を停めることもあった。子どもの背丈



ほどのアリ塚が点在している。道路沿いには1 km おきに近隣の町や村までの距離を表示した看板がある。看板といっても1 m もないような突起状のコンクリートの塊にペンキで地名と数字が書かれているだけだが、見るたびに目的地までの数字が減っていくことが、ジャングルを走る私たちを安心させた。再びゲートを越える。公園の外に出たことを意味する。木々に囲まれたジャングルが急にひらけ、荒野が一面に広がるなど、風景は変化に富んだ。荒野はやがて畑に変わり、道の交わるジャンクションには土地の人であろう十数名くらいの姿も見える。ジャンクションの側の村を抜けると、家の前で食器を洗う女性の姿を目にする。この辺りや公園内で見かける人々がマールダーリ族であるかは確認できなかった。またシャンブリという名の鉄道の駅を見かけた。河にかかる鉄橋と平行するかたちで車も河を渡り、しばらく行くとサターダールに到着。

サターダール Satadhar

ササーン・ギールから北東へ23km。サターダールに近づくとつれ、白のターバンと上下服に身を包んだ男性の姿を多く目にするようになる。彼らもサターダールに向かっているようだ。寺院前の広場は石畳になっている。パステルカラー調のタイル張りの寺院には、この地で昇天したヒンドゥー聖者ギーガー・バプ Giga Bapu が祀られており、彼の後を継ぐ聖者が何代にもわ

たって存在した。現在も後継の聖者がそこに住んでいる。ここはサマーディ（瞑想の究極の境地）といわれている。敷地内の一番奥に、その聖者に拝謁できる場所がある。その入り口横一面に幾重にも重なって子どもの写真が飾られている。中には牛の写真もある。子を授かりたいと願う人々が参詣し、願いがかなうと、子どもの写真を納めに再びやって来るのだという。拝謁場の手前にはいくつかの祠があり、朱色に塗られたムルティ（神像）が祀られている。広場の脇にはスナックやチャイ、神様の絵やCDを売っている店が数件並んでいる。これらの店先には、ギーガー・パーブを継ぐ歴代の聖者と思われる絵や写真が飾られていた。私たちはここで、豆の粉を練り上げて揚げたグジャラート州の代表的なスナック「ガーティヤー gathiya」とチャイを朝食にいただく。ここには1時間ほど滞在し、次の目的地カンカイーを目指す。

カンカイー Kankai

サターダールから南へ28km行くとカンカイーである。サターダールを出て再び国立公園内へ入りジャングルの中を走る。途中、広がる枝が行く手を阻み、ドライバーのプパットさんが車を降りて枝を払ってくれる。視界が突然ひらけたように感じると、すぐ前に川が流れていることに気付く。川の向こう側にみえる色鮮やかな寺院がカンカイー寺院である（写真2）。ジャングルの中にぽっかり浮かんでいる異空間のようであった。サターダールを出ておよそ1時間でカンカイーに到着。プパットさんに案内され、寺院内へ。入るとまずカンケーシュワリー女神（Kankesvariman）が祀られている（写真3）。これがカンカイー寺院の女神であるという。朝の拝火儀礼アーラティーの時間はとくに過ぎていたため、門に閉ざされている状態であった。しかし、しばらくすると門が開けられ、婚礼の儀式が始まった。司祭に儀式の見学と撮影を許され、儀式の最後には私たちの額にシンドゥール（朱）をつけてくれた。その後私たちは司祭からカンケーシュワリーについての話を



写真2 カンカイー寺院



写真3 カンケーシュワリー女神のマルチ（神像）

聞くことが出来た。まずカンケーシュワリー女神の縁起についてである。生まれたばかりのクリシュナ神の身代わりとして殺された女兒が、その後昇天し女神となった。その女神がカンケーシュワリーであるという。そして、カンケーシュワリーはこの地方で最も有力な女神であるという。それからヒングラージ女神との関連であるが、ヒングラージ女神とは異なり、あくまで「カンケーシュワリー女神」であると司祭は言う。司祭の話からはヒングラージ女神とカンケーシュワリー女神の関連は認めることが出来なかった。カンケーシュワリー女神の祀られている奥には、鶏に乗るバフチャラー女神、

さらに奥にはシヴァ神が祀られていた。

ジャームブル Jambur

カンカイーの南西にジャームブルはある。カンカイーからジャームブルのある南西にまっすぐ伸びる道はなく、時計回りに15km南のジャムワラを経由し、そこから西へ向かうしかない。カンカイーを出てしばらくすると大きな丸みを帯びた岩とその脇に立てられた赤い旗をがけの中腹辺りを見つける。ブパットさんに尋ねるとコーリヤル女神を祀った岩であるという。しばらくするとゲートを通る。このゲートはギール国立公園内にある野生動物保護区に入るためのゲートであった。緑の旗が立てられ、そこにはイスラーム墓らしきものが見える。畑が少し現れたところで再びゲートを通る。これで保護区から出たことになる。

ゲートを越えると一面の畑が広がっている。橋を渡りしばらく行くと道沿いに電柱が立っている。辺りは人で賑わっており、バザールというほどではないが軒かの商店が見える。そこを抜けると道がやや細くなり、その先はジャームブルの村であった。カンカイーを出ておよそ2時間である。道を左折するとすぐ、ラタンブルに祀られているパーワー・ゴールの弟といわれるナガールチー・パーバー Hazrat Nagarchi Baba の聖者廟に行きつく。そこに

はラタンプルの廟内同様、大型のケトルドラム「ナガーラ nagara」太鼓が置かれていた（写真4）。正面には彼が住んでいたというコンクリートの平屋の建物があり、中には竈があった。女性がこの中に入ることは許されな



写真4 ナガールチー・バーバーの聖者廟とナガーラ

かった。裏手には高さ2mはありそうなターズィヤ（イマーム・フサイン哀悼行列で担ぐ墓廟のミニチュアをのせた棺架）と地面から盛り上がった形でアーチのようになっている木の根がある。曲線を描く木の根と地面との間にできた隙間をくぐると、病気や怪我が治り健康でいられるという。我々もくぐらせてもらった。その周りは古い墓地になっており、大きさはナガールチー廟の半分くらいであるが、他にも廟があった。

ソームナート Somnath

3月14日、ササーン・ギールを離れソームナート経由でディーウに向かう。ソームナートはササーン・ギールの南西約25km地点に位置する。シヴァ神は12の姿で12の地に偏在するといわれており、そのうちの一つがソームナートとされている。巡礼地としてたくさんの信者が訪れる。アラビア海を望むソームナート寺院をはじめ、スーリヤ寺院、ギーター寺院、クリシュナ昇天の地、またヒングラージ寺院もある。以前にもヒングラージ調査のために訪れており、その際、地下暗部という寺院の建築構造（写真5）が、ヒングラージ女神の本尊があるパキスタンのヒングラージに類似していることが確認



写真5 地下にあるヒングラージ寺院の入口

されている。ヒングラーヂ寺院のすぐ横にある堀には、『マハーバーラタ』に登場するパーンダヴァ兄弟が彫られており、今回の調査では、ヒングラーヂ女神がパーンダヴァ兄弟の守護神として語られるようになっていることがわかった。

ディーウ Diu

ソームナートの南東約50km。ディーウはペルシアから逃れたゾロアスター教徒パールスイー Parsi が最初に到着した場所である。ダマンやゴアのように1961年までポルトガル領であり、現在は連邦直轄地となっている。全長13km、幅3kmのディーウは狭い海峡によってカティヤワール半島から隔てられた島である。街中



写真6 サンセットポイント・ヒングラーヂ寺院の下部入口

にあったコーリヤル女神の小さな祠の前で足を止めていた私たち、祠のすぐ後ろで電話屋

を営む主人が声をかけた。私たちがスイッディーとヒングラーヂ女神の調査のためにグジャラートに来たと伝えると、ディーウにもヒングラーヂの寺院があるという。場所と行き方を教えてもらい、翌日訪れることにした。

3月15日、ヒングラーヂ寺院の位置を確認するため観光局に行くが、寺院を知っている人はいない。とにかく行ってみることにする。乗り合わせたりキシヤーのドライバーは、ヒングラーヂ女神の寺院と場所を知っており、その他の女神の寺院にも連れて行ってくれるという。まずはアラビア海に面し



写真7 下部寺院内のマルチ(神像)

た島の南部沿岸、サンセットポイントにあるヒングラーズ寺院である(写真6、7)。一帯はごつごつした岩場で、寺院はその内部を掘ったような形になっている。入り口の上部には、グジャラーティー文字で「カンケーシュワリー」と書かれているのが確認できた。カンカイ寺院の女神カンケーシュワリーと同じ名前である。その寺院の隣は、階段になっていて、そこを上るとちょうど寺院の天井と同じくらいの高さのところあたりに整備



写真8 上部寺院の祭壇、広場と入口



写真9 上部寺院内のムルティ(神像)

された広場がある(写真8)。その奥には小さな入り口がある。大人が屈んでやっと出入りできる大きさである。中に入ると広がっていて、立つことはできないものの、高さも入り口より高くなっている。そこには下にある寺院同様、朱色の神像が置かれている(写真9)。この上と下両方で1つの寺院になっているという。

この寺院から100mも離れないところにコーリヤル女神の寺院がある。この寺院は一見岩場の上に建てられているように見える。というのも縦長のドーム上の屋根と旗が岩場の上にあるのが見えるからだ。しかし、寺院に近づくとも入り口から先は半地下のようになっており、そこに神像が祀られていた。海辺の岩場から離れ、リキシャーで移動。次に訪れたのはカーリー女神とブーネーシュワリーという女神の寺院である。2つは隣同士にあり、一見1つの寺院であるかのようだ。両寺院とも神像が置かれている場所は地下に掘られている。入り口の方角、神像の位置など両寺院の構造はまったく同じであった。また朱色の神像以外、女神を表すようなものは見つからなかった。パ

ザールプリントなどもなかったため、ブーネーシュワリーがどのような女神なのかはわからなかった。

ムンバイ Mumbai

3月16日、飛行機でディーウからムンバイへ。コラバ地区 Colaba の博物館や美術館が集まる一帯では、路上で時計や地図、アクセサリー、ポストカードなどさまざまなものを売っている。バザールプリントをポストカードにしたものの中で、コーリヤル女神やスイコータル女神、ヒングラージ女神の絵を見つける。裏に「ブーラン・プリンター Pooran Printer」と印刷所名と住所が書かれている。印刷所に行き、これら西インドの女神のさまざまな図柄のバザールプリントを購入する。数件の本屋を回り、スィッディーや女神信仰関連の書籍を探す。

3月19日、ムンバイからデリー、バンコクを經由しエアインディア機で東京へ。翌朝、8時着。

本調査の成果と今後の課題

ヒングラージ女神の継続調査

今回の調査ではヒングラージ女神とカンカイー寺院との関連は明らかにされなかった。しかし、ヒングラージの寺院であるという情報をもとに訪れたディーウの寺院で、カンカイー寺院の女神であるカンケーシュワリーという名を目にする。このディーウの寺院がヒングラージの寺院であるかどうか定かではないこと、ディーウの寺院においてカンケーシュワリーがどのような縁起の女神として語られているか定かではないことから、カンケーシュワリー及び、カンカイー寺院とヒングラージ女神の関連が認められたとはいえない。今後の課題として、ディーウにおけるカンケーシュワリー女神調査と、ディーウのヒングラージ信仰調査が挙げられる。

西インドの女神信仰ヒングラージ女神信仰が、パキスタン、グジャラート、ラージャスターンという西インドを中心にみられる [中村 1999] のと同様、今回出会ったコーリヤル女神やスイコータル女神の信仰も、この地域を中心に広まっていると考えられるかもしれない。なぜなら、縁起からいえば沿岸地域を中心にみられると思われたスイコータル女神の信仰が、内陸のラージピープラーやアフマダーバードでもみられたからである。またコーリヤル女神に関しては、パキスタンのヒングラージ聖地に納められた絵を撮影した写真の中に、コーリヤル女神の絵が確認できる。先行の調査報告からも明らか

なように、現在のパキスタン側のヒングラーヂ女神信仰は、印パ分離独立の影響を受けて、世界に広がるヒンドゥー移民の動向と連動する部分がある [中村 1999] では、同じく西インド中心に信仰されていると思われる女神、スィコータルやコーリヤルの場合はどうだろうか。ソコトラ島を聖地とするスィコータル女神の巡礼や信仰、そしてインドに聖地のあるコーリヤル女神の巡礼と信仰、それぞれに関してパキスタンも含めた西インド世界という視点から継続調査を行い、ヒングラーヂ信仰との比較を試みるというのが今後の課題となる。

参考文献

中村忠男

1997「ヒングラーヂ巡礼とパキスタンのヒンドゥー共同体」、『象徴図像研究』Vol.11、和光大学象徴図像研究会

1999「パローチスターン州のヒンドゥー寺院と大衆的宗教画」、『パローチスターン州ジャラワールンおよびラス・ベーラ地域における民族・宗教的図象の研究』、文部省科学研究費補助金研究成果報告書、和光大学

村山和之

1998「孤島の廃祠一七聖者たちの寄港地ハフトラール」、『通信』第94号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

前田たつひこ

2000「南西アジア研究会インド調査報告」、『東西南北 2000』、和光大学総合文化研究所